

『八月十日よ、永遠なれ』

私自身、高校時代よりの夏には戦争に関する図書を読むことを課題としており、今年読んだの中から 1 冊を紹介しましょう。

この夏、穂高 健一さんの『八月十日よ、永遠なれ』という著作が版元より本校に献本されました。図書館は現在、蔵書点検中ということもあり、寄贈手続きの前に読ませてもらいました。

この書物は、広島県大崎上島という瀬戸内海で生まれ育った作者が見聞したヒロシマでの話をもとにライトノベル風に書き起こされた作品です。物語は、東京の高校生が修学旅行で広島を訪れたことから始まります。広島旅行の最終日は班別行動で、主人公たち C 班は戦時中の検疫所や弾薬庫など戦争遺構が今でも残る似島を男女 6 人の学生と引率教師が訪れます。似島は、広島市の沖合にあり、被爆で亡くなった大勢の人が運ばれて検疫所で火葬されたという歴史をもっています。旅行中に歴史クラブの設立が企画され、その後の部活動を巡る学校生活が描かれています。そして、活動成果を発表する文化祭での標語として選ばれた言葉が「八月十日よ、永遠なれ」というタイトルなのです。さて、この言葉のもつ意味は…。

今日は「長崎原爆忌」ですが、AI との共存が問われる今、残念ながら世界は『戦争の世紀』と言われた 20 世紀前半に逆戻りしつつあります。ウクライナ戦争、イスラエル対パレスチナ、ミャンマー内戦、自国中心主義など危機的な状況になっています。こうした今だからこそ、平和をどうつくっていくかを考える一助になればと思います。以下に、この夏に読んだ戦争に関わる作品をあげておきます。例年は 3 冊ですが、80 年という節目の年でもあり読みたい本が増えました。

- 語り:森田 富美子、聞き手:森田 京子(2025)『わたくし 96 歳が語る 16 歳の夏 ～1945 年 8 月 9 日～』KADOKAWA, 96 頁。
- 原田 小鈴, アリ=ビーザー(2025)『「キノコ雲」の上と下の物語 孫たちの葛藤と軌跡』朝日新聞出版, 296 頁。
- 貴志 俊彦(2025)『戦争特派員は見た 知られざる日本軍の現実』講談社現代新書, 220 頁。
- 麻田 雅文(2024)『日ソ戦争 帝国日本最後の戦い』中公新書, 290 頁。
- 小林 弘忠(2017)『満州開拓団の真実:なぜ、悲劇が起きてしまったのか』七つ森書館, 240 頁。
- 太平洋戦争研究会編著(初版 2005、新装版 2025)『満州帝国』河出文庫, 262 頁。